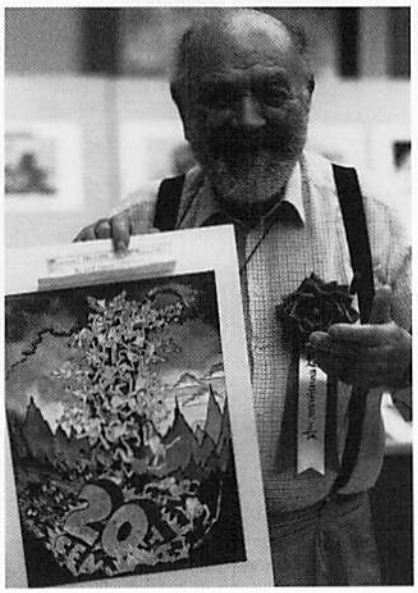
FAME Report

京都ノゾキ見トピックス

もう知らんぷりはしないで。地球の未来はこんなにスゴイ！

世界中のマンガ家たちから、あなたへのメッセージ IN 京都

取材・文／ミチハタキサコ
撮影／内藤貞保



おりしも時は、1995年9月6日。国際的非難をまっこうから無視したフランスが、南太平洋で核実験を強行したその日である。洛北の京都精華大学では「第2回　京都国際マンガ展」最終選考会が開催されていた。（マンガとは、ここではコミックマンガを指すのではない。世評を盛り込んだ風刺マンガのことである。念のため。）テーマは「二十一世紀への提言」。世界43ヶ国、568名のマンガ家から寄せられた作品数は約1700点におよび、うち入選の263点が来年2月から一般公開される。この日の最終選考会ではさらに厳しい選考がかさねられ、グランプリ・銀賞・銅賞が決定した。（ちなみに審査委員長は、マンガ界の国際的大御所、フランス人のモーズ氏である。もちろん氏は核実験反対派。）

さて、今回の「第2回　京都国際マンガ展」。第1回目に引き続き、京都国際ユーモリスト協会と京都精華大学の共催で開催される。なぜ、今マンガなのか？そしてなぜ京都なのか？毎号、本誌の裏表紙にて京都精華大学の学生と共に、堀場製作所の環境問題広告にとりくんでいる私としては、そこのところを読者諸君にじっくり考えてもらいたいのである。

京都国際ユーモリスト協会代表であり、京都精華大学マンガ専攻教授であり、自らも日本トップクラスのマンガ家であるヨシトミヤスオ氏は次のように語る。「残念ながら、国際的にみても、マンガは芸術としての市民権を得られていません。日本においてもそれは例外ではなく、公的な美術館に京都国際マンガ展の展示を申し入れても受け入れてもらえないのです。しかし、一度でもこの作品群を見てもらえば、その芸術レベルの高さはご理解いただけるはず。しかも、マンガほど多くの層の人々に対してメッセージを伝えられる芸術は他にないのですから。国際的な文化都市として世界に名を馳せるこの京都だからこそ、地球の未来への警告を、マンガによって人々に発信し続ける必要があるのです。」

昔から時代の転機たる場面には、必ずマンガ家たちの辛口のユーモアがあった。そしてその作品を通して、民衆は時代の真実を見つめ、自分たちの代弁者であるそのマンガに「ニヤリ」としていた。しかし、悲しいかなマンガ達の多くは、たった一度だけの掲載でその姿を消してしまう。

「それでも、朝、ひとこまのマンガを見ることによって、その日一日が笑顔で始まることは、日々の生活の中で大変大切な事なのです。宗教ですら戦争のひきがねになってしまう人間社会で、ユーモアだけでなく幸せをも運んでくるもの。それがマンガです。」と語るモーズ氏の言葉はある意味でとても重い。逆に言えば、マンガが世界中からなくなってしまう時。それこそが地球Xデーの前触れとも言えるからだ。

この日、グランプリに輝いたロイ・レイモンド氏の作品に「未来？そんなものは自分で選べ。」という題のものがあった。つぶれてしまった世界から逃れてきた男女2人に高台にいる神があきれ顔で答えているシーンだ。

そうだ、地球の未来は自分で選べる。そのヒントは、この世界中から集まったマンガ達のメーセッジの中にある。京都から地球を変える、そんな大きな可能性を模索する絶好の機会が、この「京都国際マンガ展」なのかもしれない。

※「第2回　京都国際マンガ展」
1996年2月29日（木）～3月5日（火）
高島屋7F　グランドホール　有料